



## 背景・目的

農薬は、農薬取締法により登録を受けなければ製造・輸入ができないが、登録するか否かの環境影響に関する判断基準は、個別農薬ごとに環境大臣が登録基準値を設定し、登録時には、ばく露評価モデルによる環境中予測濃度が基準値を超えていない農薬のみが登録される。

基準値設定後においては、適切に農薬のリスク管理がされているか、実際の河川水中の農薬濃度を調べて確認するとともに、必要に応じ、リスク評価手法の妥当性について検証する必要がある。

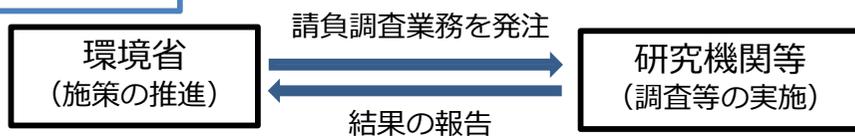
こうした中、農薬の水産動植物被害の防止に係る農薬登録基準値の設定において、ネオニコチノイド系農薬等に高い感受性を示すユスリカ幼虫を平成28年3月から評価試験に導入したところ、ネオニコチノイド系農薬等の基準値が大幅に低下し、ばく露評価モデルによる環境中の予測濃度と近接する農薬が増加。

このため、実環境中のモニタリング調査を強化し、リスク管理及びリスク評価手法の妥当性の検証を加速化する。

## 事業概要

- 農薬の登録基準値設定のための評価資料の作成、文献調査等を実施
- 農薬の水産動植物に対する急性影響に係る河川水のモニタリング調査とリスク評価手法の検証を実施
- 農薬の水産動植物に対する慢性影響に係るばく露評価モデルの妥当性を検証するため、河川水の長期モニタリング調査を実施

## 事業スキーム



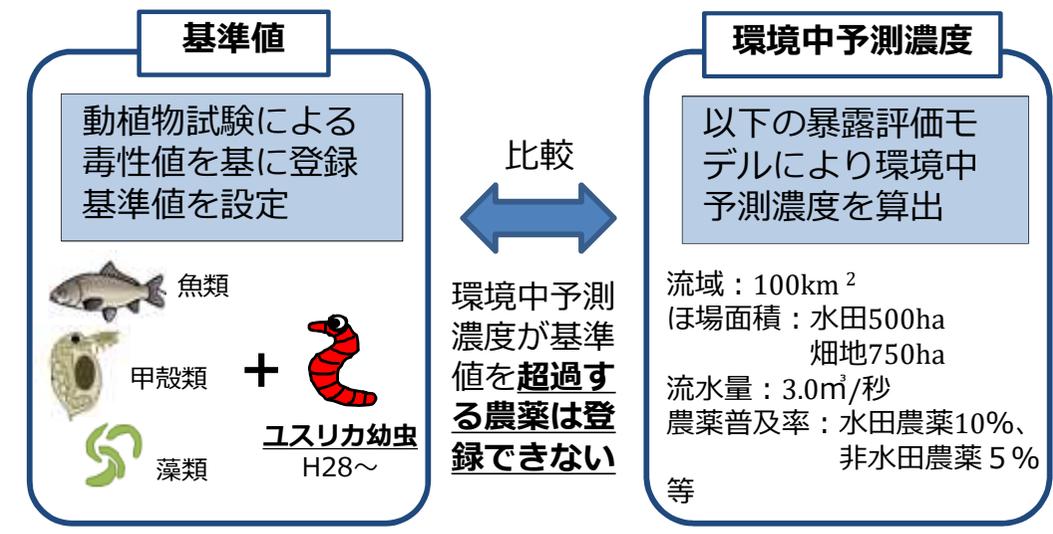
## 期待される効果

農薬の水産動植物に対する適切なリスク評価・管理を実施。

## 事業目的・概要等

## イメージ

### 【登録時】農薬の登録基準の設定とリスク評価



↓  
基準値と環境中予測濃度が**近接する場合**

### 【登録後】実環境中のモニタリングによる実態把握とリスク評価手法の検証

- ◆ネオニコチノイド系農薬等の基準値が、ユスリカ幼虫試験の導入により厳しく見直されたこと等により、基準値と環境中予測濃度が近接する農薬が増加。
- ◆このため、実環境中のモニタリング調査を強化し、リスク管理及びリスク評価手法の検証を加速化。